

## ことばと弱さ

村山紀明

森鷗外の『舞姫』の同時代評に石橋忍月の「『舞姫』の意匠は恋愛と功名と両立せざる人生の境遇に処せしむるに小心なる臆病なる慈悲心ある——勇氣なく独立心に乏しき一個の人物を以てし、以て此の地位と彼の境遇との關係を發揮したるものなり」<sup>1)</sup> という主題把握がある。これを受けて、佐藤春夫の〈近代精神のめざめ〉と〈恋愛の意義の悟得〉をめぐって、以後現在までさまざまな解釈が出来る。大雑把に言えば、主人公太田豊太郎の「近代人」的な「目ざめ」の問題をめぐって、それを肯定するにせよ否定するにせよ展開されてきた。拙論でふれることになる比較文学的研究の分野では、同時代評の中にはゲーテに言及するものもあり、さらには中国文学、ツルゲーネフに言及する論考をはじめ多々ある。ここでは、材源問題は考慮せずに、管見の限り現在まで言及のなかったバンジャマン・コンスタンの『アドルフ』との類縁性を指摘したい。結論を先どりするならば、『舞姫』は必ずしも近代人の自我の目ざめという視座から見なくとも一つの読みが可能だということである。『舞姫』に描かれた豊太郎の恋愛はこういってよければごくありふれたそれであるともいえる。これが未だにわれわれを感動させるとするならば、そのエクリチュール力によると考えざるを得ない。前途有望な一青年が留学中に、一人の娘と親しくなり、いずれ別れる運命にあり、それがその通りの終焉を迎えたというまでのことである。『アドルフ』においてもおおよその筋に関してはこれと大同小異といえるだろう。念のため『アドルフ』の梗概をしるしておこう。アドルフは、日々の生活に退屈し、誰かに愛されたいと思い、エレノールに近づく。エレノールは次第にアドルフにひかれていく。「愛」のパロールがエレノールの心をかためとってしまうのだ。ところが、優柔不断なアドルフにとって、次第にエレノールが桎梏(joug)となってゆく。直接言ったわけではないのだが、T男爵によってアドルフはエレノールから手を引くと言明したことが、エレノールに告げられる。その結果エレノールはパラノイア症状を呈して死に至る。『アドルフ』は枠組み小説であり、小説内の時系列ではのちに廃人同様となったもぬけのからのアドルフが読者に冒頭で提示される。『舞姫』の豊太郎には日本に帰ればエリートコースが待っている。後の話は彼我の相違はあるが、恋愛の結晶過程からその崩壊への道のりは酷似している。一つのパターンとしてはそれほど特別なものではないのかもしれない。両者に共通なのはとりわけコンスタンの気質におけるメランコリーの要素、たとえばアドルフはある老婦人の死を契機に死を考えると自分は穏やかな心境になるといっているが鷗外においてはそのニル・アドミラリーが通奏低音として『舞姫』の全篇をおおっている。先行研究はこの点に注意をむけてはいないが、この恋愛の根底に流れているデプレッシブな雰囲気は、とりわけ『舞姫』の読解に考えてもよいものではないだろうか。両者に共通なのは、相手の女にとっては離れることのできない関係になったと思えるのだが、男にとっては少なくとも決定的な別離の前まではそれは解消可能なものととらえられている。とはいいいながら、関係を断つことを自らの意志で遂行することができず外的要因で破局がおとずれてしまう。『舞姫』においては豊太郎の相沢への「うらみ」ということで事は一応終わっているのかのようだ。『アドルフ』の場合は、永遠の孤独にう

ちすてられてしまう男が描かれている。作者の登場人物に下す断罪という点では、はるかに『アドルフ』の方が重い。『舞姫』に関してはとりわけ最近の研究では、回想する豊太郎、回想される豊太郎という具合にディスクールの点からも、豊太郎の二重性を指摘するものがある。この点では『アドルフ』においても「語られるアドルフ」と「語るアドルフ」という図式はただちに看取される。小説の構成という点からみるならば、『アドルフ』は「アドルフの物語」の前後に、「前書き」、「刊行者の言葉」、「その返事」が配されているように、ディスクールの時とイストワールの時とは体裁上からもはっきりとわかれている。コンスタンの人間理解には、「観察する私」と「観察される私」というように、人格の統一性などみじんも望むべくもないのが人間だという認識がある。また、時間の不可逆性、いいかえるなら人間に課されている運命、パシミスティックな見方は、冷厳であるが、鷗外においては前面にでてこない。『舞姫』、『アドルフ』の生成過程とその後のいきさつという観点からも両者の類縁性は看取できる。『アドルフ』は二週間で書かれ、作者によって何度も読み返され、周囲の人間を集め、朗読会が開かれる。『舞姫』も鷗外の家族の前で披露される。

前田愛は「都市と空間」という観点から、『舞姫』における都市をたんなる背景として考えるのではなく、都市自体が重要な要素となっていて、都市が登場人物と対応しながら、都市自体が登場人物のマクロコスモスであり、登場人物が都市のミクロコスモスであり、そういう形での二重の反映であることを指摘<sup>3)</sup>して新しい広がりのある読みを呈示した。われわれはむしろつぎのような内向する視点をとりたい。『アドルフ』においては結局何が残るのか。本質だ。内部から観察された二人の登場人物、二つの性格、二つの魂、その存在の震えはわれわれを奇妙に感動させる。アドルフあるいは弱さ、躊躇、意志のなさ、後悔。これは豊太郎のそれではないか。端的に言うと、『アドルフ』には物語はない。あるのはページを追うごとに生み出される魂の状態だけである。

ここで豊太郎の天方伯との随行の件について考えてみよう。豊太郎は天方伯から問われて「いかで命に従はざらむ」と返答する。「この答はいち早く決断して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範囲を善くも量らず、直ちにうべなふことあり」とあるが、豊太郎は自己の意志の弱さを自らも認めている。さらに、相沢が来独したとき、豊太郎はエリスとの「情縁を断たん」という。しかし、この決定も、「わが弱き心には思ひ定めんよしなかりし」とあるように積極的に友の言を納得して受けとめたからではない。『アドルフ』の場合を思い出してみよう。アドルフはエレノールとの絆を断つことを自らの意志で自覚的にえらびとったわけではない。社会の意見（父がこれを代表する）に押しつぶされるという面は確かにあるが、アドルフの場合でも、事態が先行してしまい、そのよってきたる帰結を受け入れざるを得ない状況が出来するのだ。奇妙な悲劇である。アドルフは戦う前に敗れる。かれは戦わない。耐えるだけだ。行動せずに確認するだけだ。かれは情熱に押しつぶされるのではなく、あらゆる情熱にたいする不応から押しつぶされるのだ。それは弱さの悲劇といってもよいのだろう。と同時に明晰さはその弱さと不即不離の関係にある。アドルフは自分自身にたいする証人でもあり、審判者でもある。心の高揚に身をまかせたかと思うとすぐあとでそれは幻想だったことに気づき、自分を罰しようとする。「愛の魅力、誰がそれを描けるだろう」—これは幻影の厳密な分析以外のなにものでもない。『舞姫』においても、豊太郎がみずからの過去を題材にして手記を書くことによって、自己認識に大きな変化が生じている。過去の事実と、記憶によって再解釈された過去とは当然ずれている。現在の豊太郎と過去の豊太郎は、アド

ルフ同様、前者は観察するものであり、後者は観察されるものである。このような時間的・空間的隔たりを考慮せずに、忍月のような「人物と境遇と行為との関係支離滅裂なるものと謂はざる可からず<sup>4)</sup>」という非難は必ずしも首肯できるものではない。

また、『舞姫』において、エリス発狂後の離別の場面を考えてみると、豊太郎はエリスを「生ける屍」ととらえ彼女の人間性を無視していると一応は読みとれるものの、じつはここでエリスの他者性が残酷なかたちで露呈しているのだともいうことができ、これはアドルフがエレノール発狂後、永遠の孤独にうちすてられる状況と軌を一にしている。亀井秀雄は豊太郎の中に抑鬱状態をかぎとっている<sup>5)</sup>が、『アドルフ』の〈刊行者の言葉〉の中で描写されるアドルフのダルな状態はとり返しのつかない過去に完全にうちひしがれてしまっている人間の姿と通底している。このように考えてくると、『舞姫』の豊太郎像は表層的には日本の近代に発生したエリートコースを最終的には選り捨てた青年を描いているかのように思えるが、じつは鷗外の、人間のいろいろな場面における選択がそれほど自由なものではないし、現在からみるならば、両方の選択肢が可能であるようにみえても、それは過去の時点では選択不能だったのだという、『時間と自由』<sup>6)</sup>におけるベルクリン的な見方が『舞姫』からもうかがえよう。小森陽一は、「この手記の執筆を開始する時点で豊太郎に自覚されていたのは、確かに内省的な『恨』なのだが、執筆後に残ってしまったのは、内省的自己意識とは異質な、他者（自己の外側）にむけられた『憎むこゝろ』だったのである。」<sup>7)</sup>とし、友人相沢謙吉に対する呪詛を豊太郎にみてとっているが、むしろ自己の行為を省みて出てくる「うらみ悲しみ」、「悔いる」という表現にみられる悲観的な気分が全篇を通じて流れているのではないだろうか。

つぎに、相手方のパロールが男主人公の心のうちを露呈していると思われる箇所が『アドルフ』、『舞姫』、双方にみられる。アドルフがパラノイアにおちいったエレノールを見舞ったとき、エレノールはアドルフが話しかける声を聞き、「あの音なに？私を苦しめた声だわ」と叫び、前よりも一層ひどい錯乱状態に陥る。『アドルフ』においては、パロールが愛を生みだし、さらには不幸をひきおこしたのだが、われわれはまたつぎのことも認めなければならない。すなわち、恋人たちの不幸の原因となったパロールをもはやかれらが使えなくなったまさにそのとき、恋人たちの悲劇の奥底にふれるのだ。いうならばここでは一種の否定的なコミュニケーションが成立してるともいえるだろう。「私たちはこれからいおうとしていることをお互いによくわかっていた。それで、それを聞かないようにだまっていた。」言葉をおそれて、かれらにはその声までも恐怖の対象となる。「私は私が再び彼女の声を聞く時をのばしてとりあえず、幸せだった。」心ないことばで心配をかけ、男主人公はその結果、彼女の声で罰せられるということになるだろう。彼女は前述の「あの声なに？」という言葉で昏睡のときに発する。この音でエレノールは征服され愛されている自分を見いだしたと思ったのだ。しかし、彼女を神秘化し、苦しめたのはセイレーンの歌だったのだ。だから、遅すぎるのだが彼女は自分を守ろうとする。「あなたからは何も聞きたくないわ。どんな残酷なことばも。でも、私があんなにも愛したあの声、私の心の底で鳴りひびいているこの声は心にはいってこず、それをひきさくのです。」その声の調子はつましやかで嘆願するかのようだ。しかし、彼女が身をひき、自分の運命が恋人の善意にせよ悪意にせよかれの意志にはもう従わないと決心したとき、冷厳に自分自身を主張する。「なににも言わないで、あなたの言うことを聞くような状態ではないわ。」この時から、彼女はほとんど沈黙を守る。そして自分のアドルフ宛の手紙を燃やそうとすることによってその沈黙が死後まで続くことを望む。この状況では愛は深まることはない。人生の各々の時期に応じてみずからを新しくして進展することでも

きない。それは「青白く色を描かれた葉っぱ、不吉な植物の余力によって、ものうく根こぎにされた木の葉っぱで生長している。」しかしながら、アドルフとエレノールの間で、愛が完全に消滅したともいえない。事態は身をひきさくような二重性のうちに続く。恋人たちがお互いにいまだ結びついていることは否定できない。「いわば私たちは心の記憶で生きていたのである。が、その記憶も別れを思えば悲しい気持ちにさせるだけの力は持っていたが、いっしょにいることに幸福を感じさせるほどの力はなかった。」かれらの関係は精神的なものであり、純粹さという点からいうならば素晴らしいものだ。「わたしたちはまったき信頼をお互いにいただいていた。」主人公たちの間にある障害にもかかわらず非常にリアルな親密さが存在していることを証明しようとしているのだろうか。男はそれを理解するのがあまりに遅すぎたのか。かれは、自分の発見した感情と真の姿を混同したのか。エリスの「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」というパロールは、みずから選択し得ない人間の運命悲劇を露呈している。「欺」くとはかならずしも虚偽ではないし、「うそ」は過去の時点では真実の感情を表現したものであったかも知れない。「(私)はあらゆるものから作られる。一つの文句の中の一つの屈折、現れ出ようと試みているのはもうひとりの私ではないだろうか？『ウィ』という言葉が私のものなら、『ノン』というの第二の私ではないだろうか？」<sup>8)</sup>とアンリ・ミショーは言う。時間はすべてのものを風化させ崩壊させてしまうものなのだろうか。

\*                     \*                     \*

この小論でのべた“弱さ”をめぐって、近松秋江の『疑惑』について付記しておこう。

語り手は、若い男と失踪した妻のあとを追いかけてゆく。とうとう、ある旅館で、妻とその相手の男が宿泊していた事実を確かめる。

予期してはいたものの、この動かぬ証拠を発見して、語り手は極度の混乱に陥る。想像力の病ともいえる嫉妬。想像力の働き方には二種ある。すなわち、不確実性が苦悩を、逆に確実性が苦痛をひきおこす。一方では、対象が明確化されないがゆえに想像力はより生き生きと活発に働き、蓋然性というレベルで恐ろしい妄想がわきあがり、他方では、その対象が、同定されると想像力は強く働き、具体的なものを志向し、その表象のエネルギーを自らに集中させる<sup>9)</sup>。それを矛盾というべきであろうか。男主人公が妻の居所を追いもとめてゆく過程は、嫉妬の间歇性そのものである。想像力を鋭ぎすまされたものにし、心のうちを苦しいものにするのが、ある時は正確さであり、またある時は不鮮明さであったり、具体的なもの、あるいは可能事、何もかも知りつくしているということ、逆に無知であったりすることにより、その姿をかえる嫉妬の多様性<sup>10)</sup>。このような人間心理の多形性を近松秋江も描きだす。マルセル・ブルーストの、想像力の働き方の二種のプロセスのうちの形象的ではない想像力と同様、たんに方向のみを指し示すような、何も見ず、いうなれば何も表現しない—「あちらの方」「さうして魂はもうお前達が遠く身を隠してゐる岡山の空へ飛んでいってしまった。」—これは抽象的かつ、ただ指し示すだけで、何かを意味したりするのではない。どこでも使われる言葉の平凡さはふだんは別にわれわれを驚かしたり感動させはしない。

近松秋江はこのように、形象的ではなく、ほとんど妄想のようにつきまとう内部からの想像力



を描き出す。たとえば、妻の昔の片言隻句が、語り手に恐ろしい苦悩をひきおこす。

語り手の心にショックを与えるのはそれらの語の意味内容でもコノテーションでもなく、語り手の意識のあり方がしからしめるのであり、妄想がその誘因となっている。嫉妬を意識することと、それによって傷つくことはひとつで同じことだ。嫉妬がひきおこす恐ろしい苦悩は、愛それ自体が理解できない思い出になったとき、そして、人がそこから治癒したことを発見し、どうして彼女を好きだったのだろうかと不審に思うときおわりを告げる。『愛着の名残り』で近松の語り手はつぎのように述懐する。

「どうしてあんな女に前後十年も心を苦しめたらう。どうして自分の大事な生命(いのち)をそのために涸らしたのだろうか。」<sup>11)</sup>

プルーストの『スワンの恋』のスワンの叫びをおもいおこしてみよう。

「あんなことに、俺の一生の幾年かを浪費したなんて、死にたいと思ったなんて、いちばん大きな恋をしたなんて一まるで楽しい思いをさせてもくれなければ、肌にも合わなかったあんな女のために」<sup>12)</sup>

嫉妬からの解放をめぐって同一の悟得が表現されているとってよいだろう。

近松秋江の作品は、男の心理を憚りなく吐露した点に特色があるのだが、去って行った女性に執着するという男性の心理を執拗に追究している<sup>13)</sup> という点で前述のマルセル・プルートの作品における〈私〉のアルベルチース探索と著しい類似を呈している。もちろん異なる面もある。後者の場合、〈私〉が、逃げ去ったアルベルチースを追い求めるのは、捨てられた男の、相手をとりもどそうという欲求というよりは、対象喪失を体験している人間心理の反応と、その自己修復の過程をつぶさに描いたものである<sup>14)</sup> のに対し、前者においては、逃げ去った女と追いかけてゆく過程における男のどうにも修復できない心理が描かれている。近松の作品では、手の出しようのない現実を前に、語り手は幻想と苦悩に取り憑かれているのである。

現象的には、近松では、おいもとめる女の愛人(若い男)にたいする嫉妬から、プルーストにおいては、女の同性愛趣味にかんする疑惑による嫉妬から苦しみ(私(男))に生じる。

いずれにおいても語り手は一方通行の偏頗な情熱を抱いている。そこから生じる地獄の苦しみがすなわち語り手の恋愛である。しなくてもいい恋をして、恋を嫉妬の等価物としてしか理解できずに苦しんでいる。

近松においても、恋愛の別れの場面をとおして、対象喪失から生まれる悲哀の仕事が作品中に描き出されている。

## 註

- 1) 嘉部嘉隆編『森鷗外「舞姫」諸本研究と校本』桜楓社、昭和63年。
- 2) Benjamin Constant, *Adolphe*, in *Œuvres*, Gallimard, 1975.
- 3) 前田愛著作集 全6巻 筑摩書房、1989-90、5、『都市空間の中の文学』。
- 4) 石橋忍月、1) 参照。
- 5) 参照、亀井秀雄『明治文学史』岩波書店、2000年3月、「森鷗外の作品と人間像」、北海道日独協会『北海道日独協会会報』20号、26~32頁。
- 6) Henri Bergson *Essai sur les données immédiates de la conscience*. —Paris:Alcan, 1889.

- 7) 小森陽一、『舞姫』試論、第16輯、1984.6、「成城國文學論集」。
- 8) Henri Meschonnic, *Voyageurs de la voix*, Verdier, 1985.
- 9) Cf. Nicolas Grimaldi, *Essai sur la jalousie. L'enfer proustien*, PUF, 2010.9.
- 10) Grimaldi, *ibid.*
- 11) 近松秋江『疑惑』（「新小説」大正2年10月）、『近松秋江全集』全13巻（八木書店、1992.4～1994.9）1、小説I, 1992.4所収。
- 12) Cf. Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, vol. I - IV. Gallimard, 1987.
- 13) Heinz Kohut, *Restoration of the Self*, 『自己の修復』1995.10, みすず書房、本城秀次訳。
- 14) *ibid.*